

報 告

神奈川県茅ヶ崎市南西部におけるクリハラリスの観察記録

關 義和

Yoshikazu Seki: A record of a Pallas's squirrel *Callosciurus erythraeus* in southwestern part of Chigasaki, Kanagawa, Japan

緒 言

クリハラリス *Callosciurus erythraeus* は、インド東部からマレーシア、中国南東部、台湾に自然分布する、齧歯目リス科に属する小型の哺乳類である (Thorington & Hoffmann, 2005; Tamura, 2009)。日本では、特定外来生物に指定されており、在来種の捕食や農林業を含めた人間生活への被害が問題となっている (田村, 2011; 山崎, 2015)。

日本での本種の野生化は、戦前に動物園などで飼育されていた個体が逃亡したことに端を発し、現在は少なくとも 13 地域において生息が確認されている (田村, 2011)。神奈川県では、鎌倉市で 1950 年頃に見られ始めてから、南東部を中心に分布が拡大している (小野, 2001; 園田・田村, 2003)。しかし、鎌倉市以西においても徐々に分布拡大が見られ、最近では藤沢市や茅ヶ崎市の緑地でも生息が確認され始めている (岸, 2003; 長谷川・佐藤, 2009)。小規模な緑地であっても、それらが点在することで、こうした分布拡大が促進される可能性が指摘されている (Miyamoto *et al.*, 2004; 田村・宮本, 2005)。そのため、散発的または局所的な記録であっても、それらの情報を整理していくことは分布拡大の現状を把握する上で重要な課題である。

鎌倉市以西では、本種は茅ヶ崎市まで連続的に生息が確認されている (田村, 2004; 田村・宮本, 2005)。2002 年の時点では、相模川以西での生息は確認されていなかったが (神奈川県立生命の星・地球博物館, 2003)、2014 年 9 月に平塚市において目撃情報が得られている (平塚市博物館, online)。これらのことから、分布最前線は茅ヶ崎市から平塚市にかけてであると考えられる。茅ヶ崎市には 1990 年代半ばに侵入してきたと考えられている (岸, 2003)。生息は、市の北東部と南東部の緑地や千の川 (小出川に合流する相模川の二次支川) 沿いを中心に確認されているものの、南西部においては散発的な目撃情報があるのみである (かながわ鳥獣被害対策

支援センター, online; 岸, 2003; 長谷川・佐藤, 2009)。南西部における記録はここ 10 年間なく、分布域の変化については不明であったが、2019 年に当該地域において地域住民より目撃情報が寄せられた。こうした分布最前線における目撃情報は、外来種の早期対策を遂行する上で重要な情報源になり得る。

本研究では、茅ヶ崎市南西部において地域住民から寄せられたクリハラリスの目撃情報と周辺環境についてまとめたので、ここに報告する。

材料と方法

2019 年 7 月 22 日に、目撃者である關 義雄氏から見慣れない動物を見たとのことで種名を尋ねる電子メールが寄せられた。メールには写真が添付されていたため、撮影されていた個体から種同定を行い、目撃時の状況等について聞き取りを行った。また、目撃地点周辺の環境を評価するために、環境省自然環境局生物多様性センターによる第 6–7 回自然環境保全基礎調査植生調査のデータ (<http://gis.biodic.go.jp/webgis/>) から茅ヶ崎市の土地利用図を作成した。



図 1. 神奈川県茅ヶ崎市中海岸で目撃されたクリハラリス。2019 年 7 月 21 日, 關 義雄氏撮影。

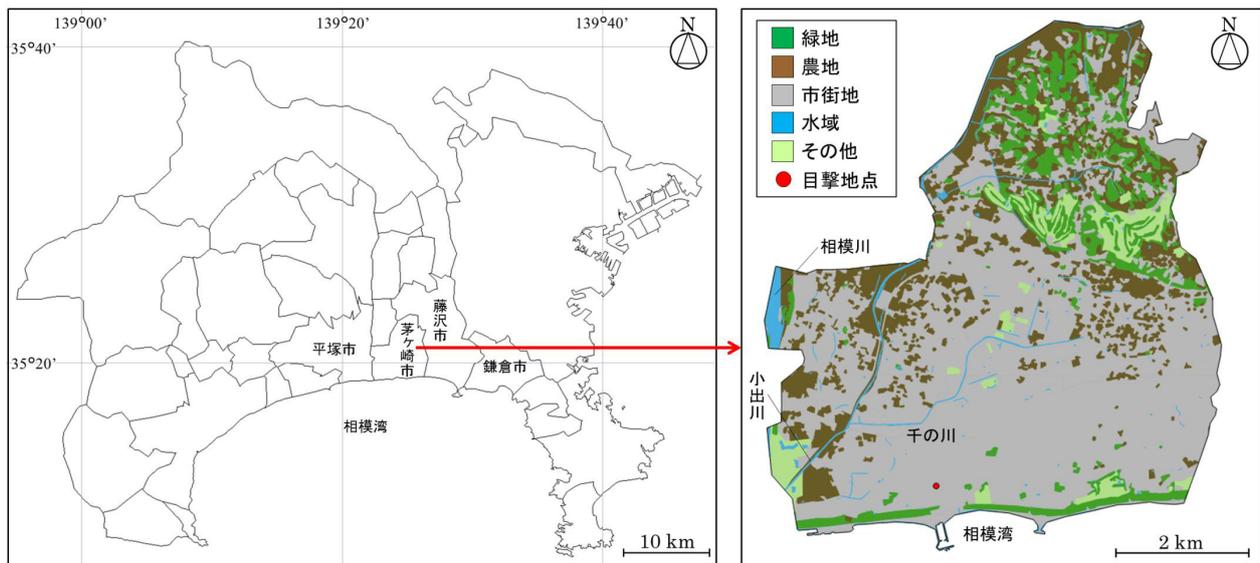


図2. 神奈川県茅ヶ崎市の土地利用図とクリハラリスの目撃地点。神奈川県地図(左)は白地図 KenMap ver. 9.0 (国土地理院承認平 14 総復 第 149 号), 茅ヶ崎市の土地利用図(右)は環境省自然環境局生物多様性センターによる第 6-7 回自然環境保全基礎調査植生調査のデータを使用して作成した。

結果

添付写真は、建物の高さ 3 m ほどのところにいた 1 個体を、2 m ほど離れた位置から撮影したものであった。当該個体の体毛は、背面も腹面も灰褐色を呈していた(図 1)。こうした色彩と、空間を立体的に利用できる生態を持つリス科哺乳類は、日本ではクリハラリスと判断できる(神奈川県立生命の星・地球博物館, 2003; 山口, 2017)。

目撃された日は 2019 年 7 月 21 日(曇り)で、場所は茅ヶ崎市中海岸、標高約 4 m、およその緯度経度は北緯 35 度 19 分 17 秒、東経 139 度 23 分 50 秒であった。撮影時の状況としては、2 m 近くに近寄っても逃げる様子はなく、地面に蒔かれていたパン粉のようなものを建物の上から覗き込んでいたとのことであった。また、関氏によると、周辺住民への聞き取りの結果、度々目撃するとの回答が得られたとのことであった。

作成した土地利用図をみると、目撃地点から直線で約 310 m のところに常緑広葉樹とクロマツ *Pinus thunbergii* を中心とする砂防林が存在したものの、それ以外にまとまった緑地はみられなかった(図 2)。ただし、空中写真をみると、上記の土地利用に反映されていない小規模の林(約 0.08 ha で、主な樹種はクロマツ)は、目撃地点から約 15 m のところに存在するのが確認された(図 3)。

考察

クリハラリスの行動圏の平均はメスが 0.72 ha、オスが 3.83 ha であり、生息の条件として林分面積が重要であることが示されている(Tamura *et al.*, 1987; 田村ほか, 2004)。そのため、今回の目撃地点のように、小規模の

林分しか存在しない環境において個体群を維持できているかどうかは明らかではない。しかし、茅ヶ崎市南西部においては、1997 年にも南湖 4 丁目の八雲神社付近(本研究における目撃地点から北西約 400 m の位置)で目撃情報が得られていることや(岸, 2003)、今回の目撃地点周辺でも度々目撃情報が得られていることから、本地域周辺を定常的に利用している個体がいる可能性は高いと考えられる。

クリハラリスは、市街地を中心とした環境でも確認されているが、そうした環境であっても生活する上では緑地の存在が重要であると考えられている(園田・田村, 2003)。そのため、今回目撃された個体が、緑地のほとんどない市街地で行動圏を維持できているかどうかについては不明である。クリハラリスの行動圏の最大径は 475 m であることが報告されているため(Tamura *et al.*, 1987)、海岸沿いの砂防林を生活の拠点としつつ一時的に市街地側へ移動してきている可能性も否定はできない。

2008 年に行われたクリハラリスの分布調査では、茅ヶ崎市南西部の砂防林内においては生息情報が得られていない(長谷川・佐藤, 2009)。しかし、南東部の砂防林内では連続的に生息が確認されているため(岸, 2003)、この 10 年間でさらに分布が拡大し、南西部の砂防林を含めて個体群が定着している可能性は十分にある。今後の茅ヶ崎市以西への分布拡大を防止するためには、南西部の砂防林が個体群の供給源となって市街地側への分布拡大を促進している可能性も視野に入れた上で、砂防林と市街地を含めて早急に分布状況を把握していく必要があるであろう。

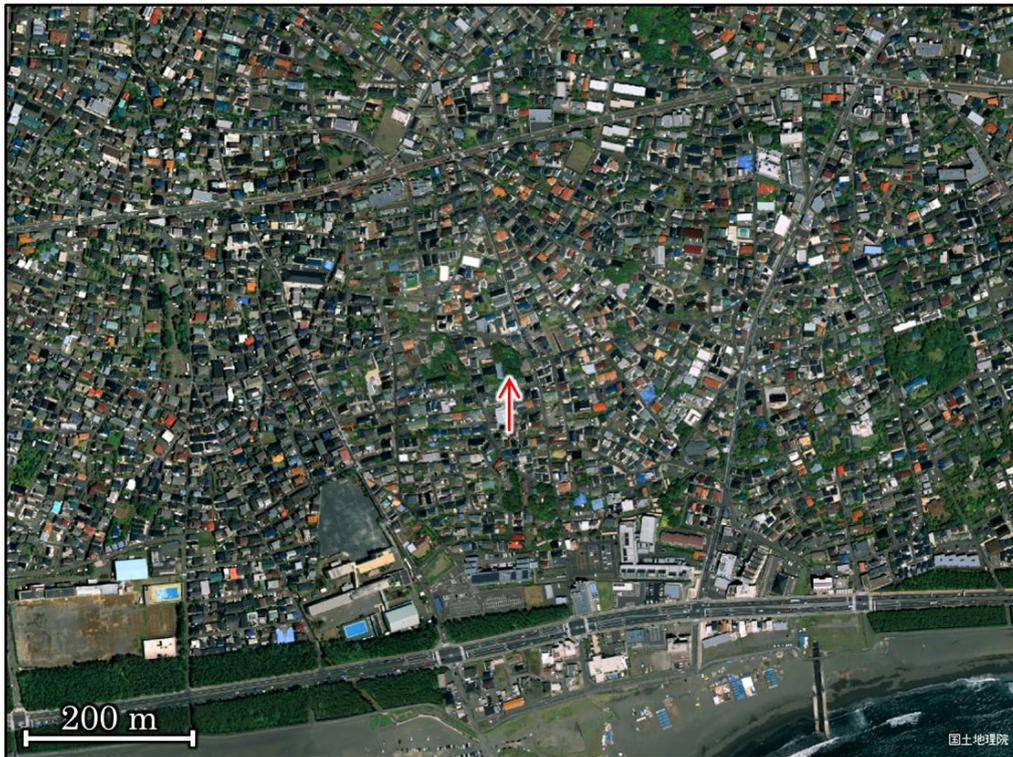


図3. クリハラリスが目撃された地点周辺の空中写真。矢印で示した林が、当該個体の確認された地点から最も近い林を示す。空中写真は、国土地理院の全国最新写真（シームレス）を使用した。

謝 辞

貴重な観察記録を寄せていただき、本報告での写真の使用をご快諾いただいた関 義雄氏に厚く御礼申し上げます。また、原稿について、多くの有益なご助言をいただいた査読者と編集委員の方々に深謝する。

引用文献

- 長谷川啓太・佐藤喜和, 2009. 神奈川県藤沢市周辺におけるタイワンリスの分布. 関東森林研究, **60**: 211–214. 平塚市博物館, online. みんなの自然アルバム 第117号 (2014年9月). https://hirahaku.jp/web_yomimono/natalbum/albu1410/index.html (accessed on 2020-December-5).
- かながわ鳥獣被害対策支援センター, online. 平成29年度鳥獣被害対策支援活動報告. <http://www.pref.kanagawa.jp/documents/24254/h29shienhoukoku.pdf> (accessed on 2020-December-5).
- 神奈川県立生命の星・地球博物館編, 2003. かながわの自然図鑑③哺乳類. 2+138 pp. 有隣堂, 横浜.
- 岸 一弘, 2003. 茅ヶ崎市におけるタイワンリス, ハクビシン, アライグマの記録. 文化資料館調査研究報告, (11): 9–15.
- Miyamoto, A., N. Tamura, K. Sugimura & F. Yamada, 2004. Predicting habitat distribution of the alien Formosan squirrel using logistic regression model. *Global Environmental Research*, **8**(1): 13–21.
- 小野 衛, 2001. 鎌倉のタイワンリス. かながわの自然, (63): 12–13.
- 園田陽一・田村典子, 2003. 神奈川県における土地利用とリス類3種 (ムササビ, ニホンリス, タイワンリス) の環境選択性. 神奈川県自然環境保全センター自然情報, (2): 13–18.

- 田村典子, 2004. 神奈川県における外来種タイワンリスの個体数増加と分布拡大. 保全生態学研究, **9**(1): 37–44.
- Tamura, N., 2009. *Callosciurus erythraeus* (Pallas, 1779). In Ohdashi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa & T. Saitoh (eds.), *The wild mammals of Japan*, pp. 188–189. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- 田村典子, 2011. クリハラリス一群体群動態のモデル. 山田文雄・池田 透・小倉 剛編, 日本の外来哺乳類: 管理戦略と生態系保全, pp. 231–257. 東京大学出版会, 東京.
- 田村典子・宮本麻子, 2005. 神奈川県におけるタイワンリスの分布拡大の現状と拡大防止対策について. 神奈川自然誌資料, (26): 57–60.
- 田村典子・宮本麻子・美ノ谷憲久・高嶋紀子, 2004. 市街地における移入種タイワンリスの生息分布と林分環境. 応用生態工学, **6**(2): 211–218.
- Tamura, N., M. Nakane, S. Satou & F. Hayashi, 1987. Home range size of the Formosan squirrel, *Callosciurus erythraeus taiwanensis*, estimated by radio tracking. *Journal of Mammalogical Society of Japan*, **12**(1/2): 69–72.
- Thorington, R. W., Jr. & R. S. Hoffmann, 2005. Family Sciuridae. In Wilson, D. E. & D. M. Reeder (eds.), *Mammal species of the world: a taxonomic and geographic reference*, 3rd edition, pp. 754–818. Johns Hopkins University Press, Baltimore.
- 山口喜盛, 2017. フィールドで出会う哺乳動物観察ガイド. 1+207 pp. 誠文堂新光社, 東京.
- 山崎文晶, 2015. クリハラリス. 関 義和・江成広斗・小寺祐二・辻 大和編, 野生動物管理のためのフィールド調査法: 哺乳類の痕跡判定からデータ解析まで, pp. 210–215. 京都大学学術出版会, 京都. DOI: 10.15022/00004888

関 義和: 玉川大学

(受領 2020 年 10 月 23 日; 受理 2021 年 1 月 11 日)